佳作

妹の生まれた一日

イギリス ロンドン日本人学校三年　駒谷 和花

世界がかわったように思えるぐらい、生きてきた中で心にのこっていることがあります。それは、今までこの世の中にいなかった人間が生まれたことです。

わたしには、五才ちがいの妹がいます。わたしは、この妹の生まれた一日を決してわすれることはありません。

その日、公園で遊んでいると、母が急には水しました。その時は、母に何が起こったんだろうと心が不安でいっぱいでした。けれど、もうすぐ赤ちゃんが生まれると聞いて、早く会いたいな、どんな子なのかな、というわくわくした気持ちになりました。病院に着いた後、母は車いすで部屋に行っていました。部屋に着くと、はじめの方はにこにこしていた母だったけれど、だんだん息があらくなってきて、顔をしかめるようになりました。わたしを生む時も、こんなに大変でも、がんばって生んでくれたんだなと思いました。その後、かんごしさんに、もうすぐ赤ちゃんが生まれるから、かんせん予防のため、外で待つように言われました。少し時間がたつと、かんごしさんが部屋から出てきて、ベビーコットにのった赤ちゃんを見せてくれました。赤ちゃんは、きれいな丸い顔で、まん月にそっくりでした。その時、ぐっとあついものがこみあげました。「今までいなかった人間が生まれた、わあー、なんてかわいいんだろう。今までずっとおなかの中にいたのは、この子だったんだな」と思いました。それから一週間ぐらいして、ついに妹がわたしの家でいっしょにくらす日が来ました。妹のほっぺをさわってみると、そのほっぺは、ぷにぷにしていてとてもやわらかく、うれしくて、わたしのテンションはますます上がりました。その後、妹のことをだっこしてみました。妹のにおいは、おかしのように甘いにおいで、心がいやされました。わたしは、ずっと妹だったけれど、初めてお姉さんになれたことが、とてもうれしかったです。今まで、自分がやさしく見まもられていたけれど、次は自分が妹をやさしく見まもる番だとやる気が出ました。

いのちは、あたたかく見まもられて生まれてくるものなんだなと思いました。自分も、家族も、友だちも、町を歩いている見知らぬ人もみんな、妹のように、あたたかく見まもられて生まれてきたんだなと思いました。この日の気持ちは、きっとわすれません。妹や、町の人や友だちにも、みんなにやさしくしていくつもりです。ときどきけんかをして、いやになる時もあるけど、わたしのかわいい妹です。